

Bú fèn bù qǐ
不 憤 不 啓

憤せざれば啓せず 〈述而第七〉

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



人材を育てるということは容易なことではない。孔子はそのことを十二分に心得た人でした。『論語』に次のような言葉が見えます。「苗而不秀者、有矣夫！秀而不实者、有矣夫！（Miáo ér bú xiù zhé, yǒu yǐ fú! Xiù ér bù shí zhě, yǒu yǐ fú!）」（苗にして秀でざる者、有るかな。秀でて実らざる者、有るかな）〈子罕第九〉。せっかく苗を植えても穂が出ない、穂が出ても実を結ばない、そういうことって有るものだなあ。「矣夫」は慨嘆を表わす助辞で、この二字には話し手の実感が込められています。言うまでもなく、人材の育成を穀物の生育になぞらえた言葉です。素質がないわけではないのに、いくら頑張っても、一向に育ってくれない。そういう弟子もいるものだなあ……。孔子にしてこの嘆き有り、ということでしょうか。教育に一生をささげた孔子だからこそ言える言葉かもしれません。

教を乞う者があれば、孔子は拒むことなく教えました。「束脩を行いて自り以上は、吾未だ嘗て誨ること無くんばあらず」〈述而第七〉。多少にかかわらず月謝を払って入門した者には分け隔てなく教える。これが孔子の教育方針でした。また、次のようにも言っています。「有鄙夫，問於我。空空如也。我叩其兩端而竭焉（Yǒu bǐ fū, wèn yú wǒ。Kōng kōng rú yě。Wǒ kòu qí liǎng duān ér jié yān）」（鄙夫有り、我に問う。空空如たり。吾其の兩端を叩いて竭す）〈子罕第九〉。ある身分の低い者が教を乞いにやって来た。全く無知であったから、できる限り丁寧に教えてやった、と。兩端を叩いて竭すとは、噛んで含めるように丁寧に教えることです。孔子の真骨頂が目に浮かぶような一節です。

しかし、いつもこの様な教え方をしていただけ

はありません。また次のようにも言っています。「不憤不啓，不悱不发（Bú fèn bù qǐ, bù fěi bù fā）」（憤せざれば啓せず、悱せざれば発せず）〈述而第七〉。相手がやる気満々でなければ、教え導くことはしない。憤は、奮起の奮と同じ。つまり、やる気で心が盛り上がることです。啓は啓示の啓、教え示すことです。悱も同様、知りたいという欲求が心に充満して苛立つこと。発はその充満した心を開いてやることです。啓発という言葉はここから来ています。やる気のないものは啓発のしようがない、ということでしょうか。

孔子は続けます。「挙一隅，不以三隅反，則不复也（Jǔ yī yú, bù yǐ sān yú fǎn, zé bú fù yě）」（一隅を挙げて、三隅を以て反せざれば、則ち復せざるなり）。四隅のうち一つの隅を挙げるだけで、他の三つの隅が反応しないようでは、同じことを繰り返し教えることはしない、と、更に手厳しい。つまり、打てば響くようでない、いくら教えても意味がない、ということです。

ある時には、噛んで含めるように優しく、またある時には、突っぱねるように厳しく。孔子先生の弟子への接し方は実に多様で、かつ臨機応変でした。それでも育たないものは育たない。「矣夫」の二文字は、そのやるせない気持ちを見事に表わしています。

だからといって孔子は教えることを諦めたわけはありません。「后生可畏（Hòu shēng kě wēi）」（後生を畏るべし）〈子罕第九〉。若者は必ずや何かをやってくれる。時に愚痴をこぼしながらも、若者への期待が変わることはありませんでした。

（わりい「中国語で読む漢詩の会」講師）